



美術史をかたちづけてきたアーティストや評論家の多くが男性であったことは間違いない。しかし、男性中心主義が弱まった現代、女性の自由な表現によって美術はさらなる豊かさを得た。女性作家として先進的な作家活動を続けてきた木村了子さんに話を伺った。

■ Interview

アートめチカウ

女性目線の開放的なエロスを

日本画家 木村了子

きむら りょうこ ● 京都府生まれ。1995年、東京藝術大学美術学部絵画専攻油画科卒業、'97年同学大学院修士課程壁画専攻修了。ミヅマ・アクション、トラウマリス、アートコンプレックスセンターほか、国内外にて個展、グループ展多数。近年では、「今様-IMAYÔ: 昔と今をつなぐ」(松濤美術館、ホノルル美術館巡回)に参加。

“ 宗教美術に出会って、悩みが吹っ切れた ”

— 今は日本画を描かれている木村さんですが、大学は東京藝大の油画科ですね。

木村 油絵を描いていたのは学部の2年生くらいまでで、その後は、当時主流だったインスタレーション作品を制作するような学生でした。学部の卒業制作では“もの派*”っぽいことをやって、先生方には好評だったと記憶しています。大学院は壁画科に進み、卒業制作の延長のようなオブジェを続けていました。ガラスを割って鉄骨のグリッドにはめていくといった作品でしたが、手は切れるし、砕いたものをつないでいく虚無的な作業は精神が病みそうで、この種の作品を一生続けていくのは無理かなと悩んだ時期もありました。

そんな折、ヨーロッパ旅行へ行く機会があり、フランスなどで見た宗教美術、とくにステンドグラスの崇高さや圧倒的なスケール感に魅了されました。コンセプトを練り込む現代美術に馴染めなかった自分にすっとはまったんですね。授業でステンドグラス講習を受けていたこともあり、ステンドグラスを主軸にしようと決めました。

— モチーフはどういったものでしたか。

木村 ゴシックの絵付ステンドグラスに、古九谷や古伊万里の意匠との共通性を見だして、それらを複合させようと考えました。加えて、浮世絵のテイストや、後にメインテーマとなるエロティシズムを融合させていく作風でした。

エロスというテーマを選ぶにあたり、大きな影響を受けたのが『温泉スッポン芸者』という東映のポルノ映画(1972年製作)です。実は私の父親が脚本を書いている

のですが、その名物シーンの一つに、日本髪のお芸者が芸者姿のまま、生足をあらわにバイクで海辺を爆走するシーンがあります。女性の性に描かれがちな悲壮感をまったく感じさせない明るいエロティシズム。女性の生命力とかたくましさが見事に描かれた映画に共感し、そうした性表現を描きたいと強烈に思いました。ステンドグラスの「聖」は、女性目線の「性」に置き換わったわけです(笑)。

— その後、日本画に転向されたのはどういったきっかけですか。

木村 父が自主映画をつくるにあたって、大正時代のヌードモデル「およう」の屏風絵を映画のセット用に描くことになりました。日本画を描いたのはこの時が初めてでした。大正期の絵師・伊藤晴雨の自宅にある屏風絵という設定で、もともと晴雨も好きだったので、描けるかなと思ったんです。でも、実際にやってみたらとにかく難しく、なんとか描き上げたという感じでした。これをきっかけに日本画を描くようになりましたが、小説の挿絵や、歌手の椎名林檎さんのライブツアーで配布されるグッズ制作の仕事をしていくなかで、だんだんやりたい表現に自分の日本画の技術が追いつかないフラストレーションがたまっていたんですね。

そんな時に展覧会で出会ったのが、大正期の日本画家・北野恒富の作品でした。人物が放つ色気や画面全体の構

*もの派 1960年代末から70年代初頭にかけて現われた日本美術史の重要動向。主に木や石などの自然素材、紙や鉄材などニュートラルな素材をほぼ未加工のまま提示した。



『桜街道花魁道中「ブッ飛ばせ!」』(2002)
ステンドグラス 45.0 × 90.5 cm



『およう 縛り四連襖絵』(2001)
鳥の子襖に水干絵の具 各92 × 184 cm × 4枚



『前菜 桜下男体刺身盛り』(2005)
白麻紙に岩絵の具 46.0 × 27.0 cm

『男子楽園図屏風 East & West』(2011) 鳥の子和紙に岩絵の具、金泥 六曲屏風 207 × 406cm



(East)

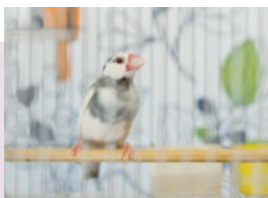


(West)

アトリエ探訪

1 アトリエを飛び回る文鳥

2009年頃から飼い始めた2羽の文鳥。名前はプーチンとアーチャン(写真)。普段は家の中を自由に飛び回っているが、絵を描くときは、フンを落とされるので困るのでカゴに入れてもらう。仕事机がお気に入りの場所なのだとか。



2 作品の裏側を拝見!

絹本作品の裏地には金箔が押されている。絹本の間隙から金色がうっすらと透過し、作品全体に絶妙な輝きを与える効果がある。この後、裏打ち(和紙を貼る)をするので、このキラキラ感が見られるのは、制作途中の段階のみである。



3 ストレス解消グッズ

アトリエに置かれたトランポリン。何か気分が悪いことがあっても、トランポリンで跳ねていると不思議と笑顔になり、制作の気分転換にも最適とのこと。通信の学生の皆さんもトランポリンを導入してみてもいいのでは?



4 実際の制作風景

描画の際は白い手袋をつけて、写真のように寝かせて描くこともあれば、大きな作品だとイーゼルに立てて描くこともある。平均して1日6~7時間ほどが制作時間。辛い体勢も多いので、休憩を入れながら描いていく。



成力に感心し、日本画を本格的に学ぼうと思ったんです。藝大時代のつてを頼って、院展で活躍している日本画家の同級生に技法を習うことにしました。電話とメールでの通信講座です。日本画の描き方の本や、画材屋で見つけた狩野派の絵画マニュアル『丹青指南』もずいぶん参考にしました。狩野派の技法は完全にマニュアル化されているので、日本画初心者の私には非常にためになりました。

一方のステンドグラスもとても楽しい技法なのですが、とにかく工程が多く、やり始めるとかかりっきりになってしまう。日本画に戻ったときに、絵を描く感覚が鈍ってしまうので、「これは両立できないな」と。私としてはエロスを表現するために、この技法じゃないといけないという制約はありません。ただ、日本画の技術が描いていて楽しいという点が、今も日本画を使っている理由です。

—— エロスをモチーフとした木村さんが、男性像を描くようになったのはなぜでしょうか。

木村 2005年に発刊された『ROSE もっと深い愛のカタチ』（倉田 真澄・著 コアマガジン）という本がきっかけです。これは女性だけに向けた性のマニュアル本な

のですが、この本の挿絵を描いてから、男性目線でないエロス表現があってもいいじゃないかと思うようになったのです。女性である私が女性像を描いてもリアリティやエロスを感じることはありません。むしろときめきの対象である男性を描いたほうが、私のドキドキ感が表現できるのではないかと思ったんです。

それで女性の妄想を表現する作品シリーズが始まりました。例えば、女体盛りならぬ「男体盛り」です。これは個展で発表しましたが、フルコースということできざまな料理を男性の裸体に並べました。その後も、「働く男は美しい」ということで描いた『男子楽園図屏風』、人魚姫のストーリーを男女逆転した『人魚王子』の作品など、イケメンを登場人物としてさまざまなテーマで制作してきています。

フェミニスト的で批評的なスタンスというよりは、イケメンを描きたい、女性が感じるエロスを描きたい、という素直な欲求のうえに、今の作風があります。だから、自分の好むモチーフに出会えたときには相当ハイテンションになります。例えば、ジャニーズ雑誌を初めて見た時は、誌面から漂うエロスに夢中になったし、子どもと一緒に見ていた戦隊ヒーローもので男性が惜しげも

『魔都の海 龍宮図屏風』（2016）紙本着彩、金箔 四曲屏風 340×176cm



“ 普遍的なイケメンを描いていきたい ”

なく裸になるシーンにインスパイアされたり。韓国人のたくましい男性に取材をした時は、描く男性がやたらとマッチョになりました。最近は今時の爽やかなイケメンより、『戦国自衛隊』など昭和の映画に出てくるキラキラした濃い男性に萌えたりします。端から聞いていると、変な人ですよ（笑）。

—— 今年に入って、仏画を描きだしたということですが、その意図はどういったものでしょうか。

木村 日本画をベースに、現代的なイケメンを「美男画」として描くというコンセプトでやってきたのですが、最近は「現代」というワードを外して、普遍的な男子像として「仏画」をきちんと描きたいと考えるようになりました。きっかけは10年前に、とある地藏寺で出会った驚

くほど美しいお坊さん。しかも、双子美僧侶だったんです。身内の慰霊のために訪れたものの、悲しさを飛び越えてしまう美しさに心を奪われました。それから10年が経ち、ようやく作品にできるかなと始めました。私の場合、刺激を受けてから作品化するまで、寝かせておく時間が結構長いんですね。

今、描いているのは地藏菩薩。そして私のテーマであるエロスを体現する愛染明王です。男子の美しさは現代にあるだけではないので、時空を超えたイケメン表現を追いかけていきたいと思っています。

information

『画集『偏愛蒐集』刊行記念展覧会』 12月6日(水)～28日(木)
会場：ヴァニラ画廊
個展 2018年3～5月予定 会場：京都場



『Heroes 男子鍛錬図屏風』（2011）紙本着彩 四曲屏風 207×350cm
『およう』（p.3）をベースに、男子の筋トレ（＝自虐）図を描いた作品

手がけた映画美術

5 『清須会議』の襖絵

本文で触れた『およう』以外に、木村さんが映画に提供した作品をいくつか紹介しよう。これは三谷幸喜監督『清須会議』にて、柴田勝家の部屋に使われた狩野派風の襖絵『虎図襖絵』。なお美術監督は本学出身の種田陽平氏だ。



Production Design 種田陽平 (C)フジテレビジョン

6 『龍三と七人の子分たち』の龍の襖絵

北野武監督『龍三と七人の子分たち』で登場した、『龍図襖絵』。主人公である親分の居間の襖絵という設定で、巨大な龍がこちらを睨みつける、迫力のある仕上がりとなっている。



龍三と七人の子分たち製作委員会 東宝

7 『TOO YOUNG TO DIE！若くして死ぬ』の地獄絵

宮藤官九郎監督『TOO YOUNG TO DIE！若くして死ぬ』で、地獄に関する本の中に登場する地獄絵。写真では見えづらいが、オリジナルの絵では主人公は学生服を着ており、映画本編では裸に修正している。



(C)2016 『TOO YOUNG TO DIE！若くして死ぬ』製作委員会

8 『忍びの国』の壁張付絵

2017年に公開された中村義洋監督『忍びの国』では、木村さんが描いた松が壁一面に使われた。映画の仕事では、これが最新のものとなる。

